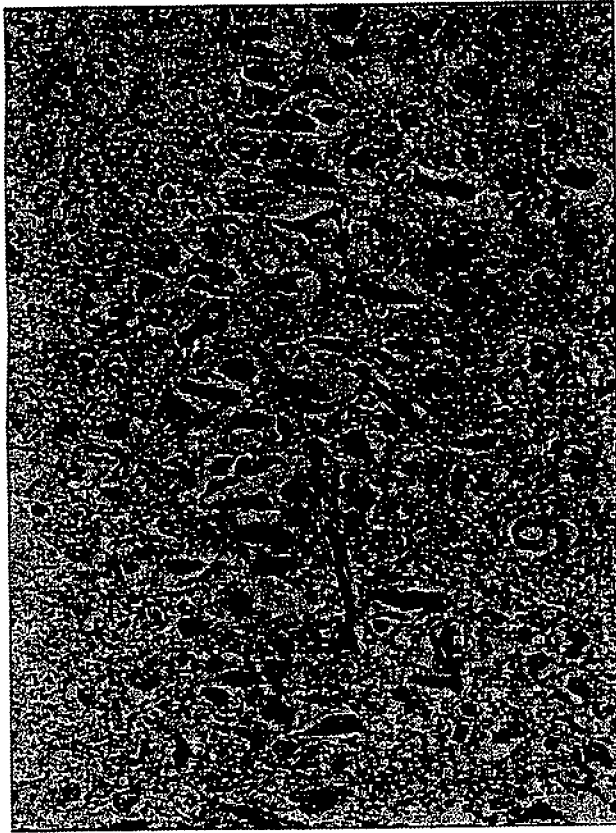


豚の血管のフィブリノイド変性と好酸球性脳炎

農林省家畜衛生試験場病理第一研究室 第13回獣医病理学研修会標本 No.197



昭和47年8月21日に生まれた同腹仔豚10頭のうち、1頭は死産、7頭は虚弱でまもなく死亡した。10月4日残り2頭が発熱し、1頭は死亡した。本例は一旦回復したが10月18日再び発熱(42℃)、鼻汁を出し、流涙を示し、10月21日鑑定殺された。

肉眼的所見 肝附属、胃附属および体表のリンパ節の腫脹と心内膜下の出血がみられた。

菌検査成績 主要臓器よりわずかのブドウ球菌と大腸菌が分離された。

組織学的所見 主要病変は脳と小動脈にみられた。脳では大脳から中脳、橋にわたり、嗅脳の一部に好発して神経細胞の変性があり、もっとも顕著な変化のあった海馬旁回および透明中隔のNucleus septalisには巣状ないし仮層状に神経細胞の変性がみられた(写真1はN. septalisの神経細胞の変性を示す)。この領域には好酸球、円形細胞の囲管性浸潤があり、脳実質内にも好酸球が浸潤し

ていた。一方脳、腸および肺の小動脈にフィブリノイド変性(写真2)がみられたほか、脳脊髄、肝、脾、腎、心、肺、顎下腺、胃腸、膵およびリンパ節の小動脈に壁の疎性化、平滑筋細胞や外膜細胞の腫大・増数などの変化がみられた。また脳の小動脈や毛細血管周囲腔にはエオジン好性の硝子滴状物が充満していた(写真2)。この滴状物はPAS陽性で、Azan染色で赤く、PTAH染色で青く染まり、ヘモグロビン染色、アミロイド染色、メタクロマジーはいずれも陰性で血液由来とみなされた。

本例の脳病変は小動脈壁の変性、透過性異常などにより惹起された循環障害による脳実質の乏血性変化とそれに対する好酸球、血管間葉系細胞の2次的反応と解される。したがってここでいう好酸球性脳炎はあくまで病変に対する表現である。本病の病像はCerebrospinal angiopathyの名で報告されている病に一致するが、その本態については今後の検索にまつべきであろう。